

リオタールと、レヴィナスなき顔¹

フランソワ＝ダヴィド・セバー

(翻訳：小野和)

要旨

「顔」について書く際、リオタールは——レヴィナスの最も優れた読者の一人であり、レヴィナスの思想を自分自身のために活用してきた人物であろうが——レヴィナスによる顔になんら言及しなかった。リオタールは顔を、完全にメルロ＝ポンティ的な文脈において、世界の〈肉〉に取り込まれた匿名的な風景たる顔として思考し、記述する。なぜそうなるのだろうか？ リオタールのこの重大な不忠実さは何なのだろうか？ 私は、この不忠実さが実際には忠実さの一形態に属することを示すつもりである。一方では、それらの遂行する結果において、レヴィナスによる顔とリオタールによる顔は非常に近い。匿名態の試練が自己性を与え、単独化するのである。他方では、リオタールは感性的なもののうちに〈顔〉としての〈命令〉を刻み込むことを拒絶し、それゆえリオタールはレヴィナスの思想のこの「位相」を拒絶する。だがそれは、この観点から見れば、リオタールがレヴィナスよりもいっそう〈命令〉に忠実だからである。まさにここで問われるべきは、レヴィナス的記述に対する不忠実さであり、レヴィナスの観点からすれば侵すべからざる要求に敬意を払わないというリオタールのやり方である。そうではあるが、この命令を欲動や欲望、拉致や感性的情動から守るという配慮は、これもまたレヴィナスへの忠実さの一形態なのである。

最初の指摘はある驚きである。よく知られるように、リオタールは 1960 年代末のフランスにおいて一貫した仕方でレヴィナスを読み、コメントを加えた最初期の人々の一人であり、またレヴィナスを参照することは彼自身の思考を構築するものであった。ところが、晩年、顔についてのコロック²で講演した際、リオタールはレヴィナスの顔について一言も触

¹ この論文は、TTH (Technologies et Traces de l'Homme) 研究プログラムの枠組みで作成されたものである。同プログラムはピカルディ地域圏と欧州地域開発基金 (FEDER)、コンピエーニュ工科大学の支援を受けている。初稿は 2013 年 4 月にプラハ・カレル大学人文学部のジャン・ビエルハンツルとカレル・ノヴォトニによって組織された研究会「レヴィナスと社会性」で発表された。

² « *Formule charnelle* », conférence donnée lors du colloque « Faire visage » de 1996, pp. 273-283, in *Misère de la philosophie*, Paris, Galilée, 2000.

れず、レヴィナスそのひとについてもなんら言及しなかった。リオタールはまったく別の糸を手繰る。メルロ＝ポンティの『眼と精神』や『見えるものと見えないもの』の跡に沿って、リオタールは顔を風景として、風景を顔として考える。リオタールの筆の下では、顔は「見るもの」の「見えるもの」への「開け」であり、見るものと見えるものの共属、——セザンヌの言葉を借りれば——「山が私を見ている」のごとき共属のことである。私は裂開（dehiscence）の運動のなかで「見えるもの」に対して自らを開くことでのみ見るのだが、「見えるもの」それ自体もこれと対照的に「開かれて」おり、その意味で、それ自体で「見るもの」である。顔とはつまり、見えるものの条件に引き上げられた見ることそのものであり、この見ることそのものも、根源的な反転可能性において、それと対称的な〈見ること〉によって、見えるものとして惹起される。だから、山は顔であり、人間のどんな顔もすでに風景であって、それらは本源的な共属関係の中にあり、それを経ることで、どんな安定した個別性もつねに解体され、つねにすでに「〈世界〉の肉」の匿名性に取り込まれている。レヴィナスの場合、顔はフッサールが言うところの「地平の地平」としての〈世界〉を「穿つ」のだが、それに対して、リオタール——ここではメルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』に最接近する——においては、〈世界〉は顔である——それゆえ、〈世界〉における諸々の顔は〈世界〉の裂開そのものであり、つまり世界がそれ自身に対して自分を半開にする仕方なのである。この裂開は個別性を喪失させ、匿名性へと埋没させる。ある意味で、われわれはレヴィナスから非常に離れたところにいる。顔は知覚の〈世界〉に差し向けられ、あまつさえ、その〈世界〉が匿名的な肉として「顔」なのだから。

レヴィナスへの、顔についてのリオタールの重大な不忠実さ。そうではあるが、この不忠実さをもう少し詳しく検討してみよう。

このテキスト〔「肉の公式」(Formule charnelle)〕において、リオタールは以前の『言説、形象』——そのころ彼は「フィギュラル」(figural)の概念を錬成していた——よりもメルロ＝ポンティ的である、との指摘がなされえた³。手短かにいえば、『言説、形象』において、リオタールはある程度までメルロ＝ポンティの知覚と身体の現象学を改めて取り上げ、引き継いでいる。ただし、その際リオタールは、この後者の現象学は、欲望(désir)に、ましてや欲動(pulsion)、フロイトが強調したエネルギー論に対して十全な権利を認めるには至っていないと註記している。そして実際、リオタールが顔を明確に取り上げたテキストに、欲動と欲望はほとんど登場しない。それにもかかわらず、〈フィギュール〉(Figure)ないし〈フィギュラル〉(Figural)は、欲動ならびに欲望と全面的に関係している。リオタールにとって、欲望は見るものであり、見られる〔自分を見る〕ものである。つまり、欲望は聞きとられず(〈法〉は、理解するための目なき耳に命じ、要求するという意味で)、書き留められな

³ たとえば以下を参照。Stefan KRISTENSEN, « Les empreintes du silence. Merleau-Ponty, Lyotard et les intrigues du désir », Retour d'y voir, no 6, 7 et 8, Une scène romande, Genève, Mamco-Les Presses du réel, novembre 2013.

い。正確には、欲望は言語学的に産出された意味作用ではなく、また読まれるべき記号ではないという二重の意味で、欲望は書き留めされない。欲望はエクリチュールでさえない——ただし、エクリチュールという物質的徴しが、可能的反復性という規則にあらかじめ捕らわれているとして。欲望はみずからを表出する。すなわち、欲望はほかならぬ脱自的力動性のうちに身を置き、その力動性に全面的に存するという仕方のみずからを表出するのだ（それを起点として欲望が外に出ていくことになるような内部のない、純粋な出口である）。欲望は遂行されるのであって、その遂行以外のどこにも身を置かない。フロイトの夢に関するテキストを読みながら、リオタールは、欲望が夢の中で表現される操作は決して言語の操作ではない（たとえこの操作が言語に影響を与えてとしても、そうなのだ）と強調し続けている。欲望は規則をもつ構造的な遊びでもなく、解釈すべき意味でもない（途方もない省略をするなら、ラカンでもリクールでもない）。夢は、シニフィエや内面や下部に準拠するような仕方では欲望に準拠しつつ解説されるべきテキストではない。ましてや、表象の対応物に準拠するのでもない。夢は欲望の痕跡である。欲望は発散しながら広がるエネルギーであって——、それが諸形態を前提とするのはそれらの形態を動転させるためでしかない。そして〈フィギュラル〉とはまさにこれであり、諸形態を動転させることでみずからを消費する欲望からなるのだ。〈フィギュラル〉は「見」られる〔自分を「見る」〕。なぜなら、すべての言葉（命じる言葉や、同じく意味を産出せんとする言葉）の沈黙のなかで、目—欲動は、夢のなかやキャンパスのうえで、配置・秩序を、規範そのものを揺るがす諸欲動と再び結びつくからだ⁴。リオタールが実際にこう書くことがあったように、〈フィギュラル〉が「痕跡」であるとして、「痕跡」はエクリチュール、「文字」ではないし、ましてや「記号」、「差し向ける」、究極的には意味へと差し向けられる「記号」ではない。「痕跡」は指標でさえない（ここにいる指標は看過された無意味性に特有のもので、それは実際には、消失した単独性の現前へと送り返される）。「痕跡」が意味するのは、欲動の現前——純粋な遂行——が、にもかかわらず撤退を余儀なくされるということである。すなわち、欲望は完全かつ直接的にみずからを示そうとすることで、みずからを燃やし尽くし、みずからを破壊し、このような仕方のみずからを成就しようとするのだ。これがフロイトの教えである。欲望は純粋な遂行であるが、諸形態を動転させることでのみ（直接的ではなく）与えられる。例えば、力動性は形態を捻じ曲げるが、形態をそれでもなお絵の中で維持する。絵は真でも偽でもなく、生きた脈動である⁵。再活性化され、覚醒させられ——見られるべき眠れる強度としての〈痕跡〉。まちが

⁴ まさに欲望の中心にある欲動に、リオタールは好んでこだわった。ここでは、リオタールが区別する様々な「諸〈フィギュール〉」の研究、そして彼が「死の欲動」に与える身分についての研究（「死の欲動」は動転させ解体し解く^{ほど}のであって、それゆえ欲望と〈フィギュラル〉の可能性の条件である）には立ち入らない。

⁵ 「眼、それは力である。[...] 絵は、今日の記号学者たちが言っているように読むべきものではない。クレーは、絵は食うべきものであると言った。クレーはまた、絵は見させ、模範的なもののように、能産的自然のように眼に供される、なぜならそれは見ることは何かを見させるからである、とも言った。しかるに絵は、見るものがひとつのダンスであることを見させる。」(Discours,

いなく、リオタールにおける「痕跡」は、例えばレヴィナスやデリダのそれとは非常に異なる仕方で解される。レヴィナスやデリダにとって、痕跡は根本的な不在を告知する（「決して現前したことがないもの」の不在、それが現前として固定されるのだ）。デリダにおいて（これはレヴィナスには当てはまらない）、痕跡が、徴づけられた物質的支えの重大さの謂であることも付言しておかねばならない。この支えは不在をあらわにするとともに、その不在を補うことを約束し、反復可能性（支えを徴しづける刻印・記入）を可能ならしめる。リオタールにおける不在は、実際には馴致不能な存在を指し示し、それを前にして精神はパニックに陥り、常軌逸脱する。まるで腕が力なく垂れるときのように、足がすくみ立っていられなくなるときのように。それは過剰なのだ。痕跡としての〈フィギュラル〉の遂行は、それゆえ、それを秩序のもとに組み入れようとするすべての肖像をつねに超過する、この現前の「過剰」なのである。風景たる徴しが支えを消し去る、とリオタールは言っている⁶

次の点を強調しておこう。すなわち、〈フィギュラル〉は、「見ること」それ自体が「観照的に見ること」の領域から切り離され、「見ること」がまずは欲動に、力、エネルギーの領域に属するとみなされる限りでのみ見られる〔自分を見る〕のであるのだが——、その際、「見ること」の欲動は、諸形態や色において示される諸々の欲動や強度と出会い、これらの形態や色は決してやすらわず、決して完結しない。欲動的な目は、諸フィギュール、〈フィギュラル〉を見るのであり——このような見ることは観照的な見ること、「表象し」、記号を読み、エクリチュールを解読する観照的な見ることとは何ら共通点を持たない。

『言説、形象』のリオタールは、メルロ＝ポンティ的な感覚（アイステーシス）と知覚への関心を保持しつつも、その一方で、（この頃のリオタールの視点からすれば、『見えるものと見えないもの』のメルロ＝ポンティにおいてはまだ非常に控えめであった）欲動の前代未聞の力を明らかにしているが、多くの点で、こうしたリオタールの所作を自分のものとして「取り入れる」ならば、「肉の公式」（Formule charnelle）でのリオタールが記述した「顔—風景」は、依然として欲動的なものたる欲望を内に秘めており、さらには、見ることの欲望の力としてのみそのようなもの〔顔—風景〕として存在するのだと判断できるだろう。顔とは

Figure [1974], Paris, Klincksieck, 2002, pp. 14-15). [ジャン＝フランソワ・リオタール著、合田正人監修、三浦直希訳『言説、形象』法政大学出版局、2011 年、11 頁]

⁶ たとえば「スケープランド」（Jean-Marc BESSE (dir.), *Revue des sciences humaines*, no 209, Écrire le paysage, Lille, Université de Lille-III, 1988, pp. 39-48) にはこう書かれている。「この追放は絶対的であり、精神たる諸形態そのものの爆縮である。（風景が作り出し、残すのではないような）風景たる徴しを、刻印・記入としてではなく、支えを抹消することとして想像しなければならない。何かが残るとすれば、それはこの不在であり、この不在こそ、恐ろしい現前の記号としての価値をもつ。そこで精神は〈失敗して自分を逸した〉のだ」。このくだりを読むことで、レヴィナスとの近接性を指摘出来るだろう。諸形態の配列・秩序を常軌逸脱させる遂行性が問題なのだ。ただし（これは些細なことではない）リオタールは還元不能な不在によりむしろ、「超現前」（surprésence）に向けて合図をしているのだが。

つまり、見ることとしての欲望であり、この欲望は、見ることでありながら、それが見えるものとして明かす見ることによって、それ自身が見えるものたらしめられるという反転可能性のなかで可視化する。すなわち、「顔はビジョンを見させる」のだ。その言ったうえで、このような記述が件の「事象そのもの」を明らかにすると判断されうるもので、またこれらの記述がリオタールのテキストにしっかりと投錨しているのだとしても、これらのテキストの文言を尊重するために、次のように正確を期すことが求められる。「肉の公式」を書いていた頃、リオタールは『言説、形象』の頃より以上にメルロ＝ポンティ的であったが、それは、リオタールが今や力動性と欲動としての欲望を感覚論〔美学〕の中心に据えることを躊躇しているからであり——、遂にリオタールは欲望の外で、欲動に抗してさえ⁷感覚的〔美的〕感情を考え、記述するところまで突き進む。実際、リオタールの注意はもはや、感覚の只中に感性そのものとして存する欲動の力や力動性に向けられてはおらず、——リオタールは掴みがたい「接触」(touche)、「主体」を触発し、拉致する(rapte)「接触」を掴もうとする。(ぞんざいな言い方になるが、この点についてフロイトは今、欲望の力動性のモデルというよりも、トラウマと拉致としての情動のモデルを提供してくれる。)より正確には、リオタールにとって問題なのはまさに、欲望のはるか手前にある原—感受性(archi-susceptibilité)としての「感覚的〔美的〕感情」に到達することであり、それは次のように理解された欲望とは無関係である。すなわち、1) エネルギー態(欲動)としての欲望、2) 筋立てることや物語化するものとしての欲望、3) 利害関心たとえば、性的なあり方や性差でもって惹起される利害関心——に捕らわれた欲望とは無関係なのだ。したがって、「肉の公式」で記述される「風景たる顔」は、欲望や欲動の力動性よりも情動の「接触」、つまり感情として感覚されるものに関係していると考えの方が、リオタールの思想の字義と進展により忠実であろう。「風景たる顔」は、リオタールの道筋の明確な一貫性に従うならば、欲望、利害関心、筋立てから解放された没利害の感情の感覚論〔美学〕とより関係することになるだろう。この感覚論〔美学〕は、知覚の奥深くで、現前不能なもの——どんな舞台でも現前不能なものによる「接触」へと差し向けられる(リオタールはそう言わないが、この「接触」は原—根源的(archi-originaire)、あるいは無一起源的(an-archique)なものでさえある)⁸。

⁷ コリーヌ・エノドーは、この異動の重要性を見過ごさないようにと筆者に促すとともに、より全般的には、このテキストを注意深くそして寛大に読んでくれることとなった。記して感謝する。この異動については、ジェラルド・スフェズ の *Ce qu'il veut, avec présence* (『何を描くのか? アダミ、荒川、ビュレン』(*Que peindre ? Adami, Arakawa, Buren*) の跋) に言及することができる (*Que peindre ? Adami, Arakawa, Buren* (1987), pp. 418-448, dans la réédition proposée comme volume V de l'édition des écrits de Jean-François Lyotard sur l'art contemporain et les artistes (Louvain, Presses universitaires de Louvain, 2012)。

⁸ 『何を描くのか? アダミ、荒川、ビュレン』(*Que peindre ? Adami, Arakawa, Buren*) において、とりわけ「率直さ」と「記憶想起」において、この異動、あるいはこの抗争さえもが、『言説、形象』に「立ち戻る」リオタールそのひとによって明晰に定式化されている。このことは、先に指摘したメルロ＝ポンティへの回帰(この回帰は欲動の力動性に、欲望の筋立てに「抗し」、見えるも

とはいえ、どの解釈の道を選ぼうとも——もちろん、これら二つの道のあいだの抗争に重要性がないわけではない——、賭けられているのはいずれにせよ、感性的なものと顔のあいだの引き裂きえない近さである（リオタールのなかでは、感性的なものを思考する二つの仕方、第一は欲望の力動性を重視する仕方、第二はトラウマと没利害の感情としての「接触」の受動性を重視する仕方とのあいだの差異が作動している）。そこで、リオタールの思想に内在するこのズレの検討は（それ自体重要なものではあるが）脇に置いて、私はこの論考では次の点を強調したい。すなわち、リオタールの「レヴィナスを欠いた顔—風景」は、感性的な顔、感性的なものとしての顔、顔としての感性的なものなのである（感性的なものが欲動の力動性に捉えられているにせよ、それとも、「接触」の受動性に凍りついているにせよ）。この点に集中するのがここでは望ましい。

フィギュラルは「顔」をなすだろうか？ 『言説、形象』のリオタールから出発して、「風景たる顔」を見ることの欲望、あるいはむしろ見ることたる欲望、ひいては欲望として解し、そのようなものとして可視化される見ることとして解することが許されるなら、間違いなくそうである。一方で、リオタールの移行を認め、「肉の公式」の文言に留まるなら、「顔—風景」としての感性的絡み合い（entrelacs）はまさに、情動による、受け入れがたく同化しがたい接触による拉致の試練なのだと言うのがより適切だとも判断できるだろう。

しかし、いずれの場合にも、「顔—風景」は感覚（アイステーシス）としての「見るもの—見えるもの」であり、感性的なものの中心における試練——制御を失い、匿名化する喪失の試練——である。いずれの場合にも、そしてここで我々にとって重要なのは、「風景たる顔」は「レヴィナスを欠いて」おり、ある意味で「レヴィナスに反して」さえいるということである。

しかし、私が示したいのは、レヴィナスとリオタールのあいだの、顔をめぐる見かけ上の不和は、実際には、また非常に深く、レヴィナスへのリオタールの忠実さに起因するのだということである。実際のところ、リオタールは、「顔が語る」（レヴィナス『全体性と無限』の表現）とは主張しない。——より正確には、言葉（parole）が顔を持つないし顔をなすことを主張しない。どういうことか説明しよう。リオタールはレヴィナスをもつばら、最も根本的な命令の証人、そのようなものとしての倫理的厳命そのものの発端の証人、『文の抗争』でリオタールが命令的なものの「言語ゲーム」と呼ぶものの証人として理解しており、まさにそれゆえ、リオタールは、現象性（それは〔命令的なものとは〕別の「ゲーム」、存在のゲームであるだろう）によるあらゆる汚染から、命令をいわば避難させ、見えるものの諸形態のあいだに命令を到来させないようにしている。理解し構想すべきものとしての形態（観照）、あるいは、知覚が構想の前提となるとときには知覚されるべきものとしての形態（予め

のと知覚の存在論と「共に」なされる）においても問題になっている。しかしながら、このメルロ＝ポンティへの回帰はフロイトを否認することにはならない。これらのテキストにおいてカント的思考がもつ重要性もまた無視できない。

秩序付けられ、よき形態となっている)、そうした形態のなかに命令が介入することをリオタールは潔しとしない。しかしまた、リオタールは、欲望ならびに欲動的なものと妥協して、〈フィギュラル〉の只中に命令を介入させたいわけでもないし、また、美的感情における接触によるトラウマとの汚染的な近さのうちに命令を介入させたいわけでもない。「反一現象」たる顔の記述において、命令の、「汝殺す勿れ」の現象学的支えを開示するところではないのだ。リオタールは命令を、現象的なものとのどんな連関からも守ろうとする(現象的なものが〈フィギュラル〉として記述される場合も含まれるし、おそらくその場合がとりわけ顕著だろう。また感覚の「接触」によるトラウマ的拉致を指し示そうと試みるに至る場合でさえ、命令は現象的なものとは係らない)。そうは言うものの、このような事情なら、こう言ってよければリオタールは「顔」を度外視できるのではないだろうか? しかるに、要請された場合にはもちろんだが、リオタールは顔にあますところなく場所を与えようとした——ただ、われわれが見たように、それは匿名的な「顔—風景」だった。論点を掴むために、ここでしばし、リオタールが理解するものとしての「風景」の概念に立ち止まる必要がある。リオタールにおいて「風景」と言われるものすべてをここで網羅的に取り上げることはしないが、すでに引用した「スケープランド」と題された短いテキストから出発して、いくつかの重要な特徴を取り上げる。「風景」(landscape)は「scapeland」として、すなわち「逃亡」として、「風景 (paysage)」そのものと同じく動物の純粋な逃亡として開示される。リオタールにとって、風景は「場所」をなさず、局所化されないのだ。生の正常性(リオタールはそうは言わないが「生活環境」)によって統御された観点からは、風景は見えない。風景があるのは、私がみずからの空間の座標系をまったく別の空間に連れ込むからであり、このまったく別の空間は、あらゆる確実な視点、あらゆる規則、あらゆる統合がかき乱されるなかで、「風景」をなすのだ。鳥にとってのモグラの巣のようなものである。「風景」の概念は、リオタールにとって決定的な「異教的」(païen)の概念との共鳴を生み出す(つまりこの概念はレヴィナスとはまったく異なる意味をもち、肯定的な含意を持たされている)。それは純粋な境界——「辺境」(pagus)——自分の位置を知るための内側を欠いた、純粋な外部なのだ。リオタールにおいては、配列を乱すこと、統合なき最初の脱形態化へ向けての努力は、外部が外部として開かれることと一致する。すなわち風景は、それによってコード化されるとみなされる背景とは決して関係づけられず、風景を「イメージ化する」(想像する)ことでその統合を確固たるものとするような内面性とも決して関連付けられないのだ。

繰り返すが、風景であるようなこの精神のパニックは感性的なものそのものであり、感覚的接触によるトラウマ(あるいは、『言説、形象』のリオタールの記述を維持するなら、フィギュラルの中心にある欲動的な力)なのである。

しかし、なぜ顔は風景なのか? なぜリオタールは苦心して顔に地位(ステータス)を与えようとするのだろうか、それも、顔が風景となるような仕方では?

「スケープランド」では、二つの例が挙げられている。老いたベケットの顔写真と、たった今生まれたばかりの子にとっての母の顔、である。顔がまずもってこのパニック——この

「風景」、鳥にとってのモグラの巣でないのだとすれば、顔は一体何であるというのか？すべての凝固された特徴(traits)は、可能的には見分けが付き索引の項目となりうるもので、またすでにして、可能的には意味(サンス)と解読可能な意味作用の側にあるのだが、このような特徴が「顔」をなすのは、目印を欠いた匿名的「風景」そのもの——内部も、掴みどころもなく開く大きな外部——が背景となる場合に限られる。後から、目、鼻、口は、解読されるべき表意文字として「固定」されることになるのだ。しかし、動転させる風景を背景とするのでなければ、何ものも「顔」をなさないだろう。動転させる風景が、それを包含し秩序立てるものによって絶対的に覆い隠されることは決してない。本当に風景を堰き止めるわけではないからこそ、風景を包含し、秩序立てるものは「顔をなす」のである。しかしながら、配列ないし秩序は不可欠である。たえず侵犯されるためにそれは維持されるのだ。というのも、このような侵犯においてこそ風景は風景をなすのだから……。ベケットの顔、母の顔、すなわちアレンジされた純粋な風景。アレンジされたこの「純粋な」風景を、リオタールは(結局それは抽象化の分離する挙措なのであって、われわれはこの風景に決して直接アクセスしないのだが)顔そのものと区別し、「面」(face)と呼ぶ。「面」はそれゆえ非人間的なものに属するが、この非人間的なものに、我々は人間的である限りで固執するのだ。なぜだろうか。それは、顔は「面」を覆うコード化された配列・秩序ではないからであり、顔は、「仮面」や「役柄」⁹の配列・秩序をつねにすでに動転させる「面」あるからなのであ

⁹「顔」はかくして、リオタール的な緊張を機能させるために、いわば二つの「非人間的なもの」の間に挟まれている。すなわち、「面」の「異教的な」匿名性——計算不能で分類不能な——と、固定された諸特徴(traits)——実体的な同一性、同定可能な「人物」(personne)をコード化する——とのあいだに。そこで「顔」が匿名性と単独的なものの表面的な対立を短絡させるということ、どれほど指摘してもしすぎることはない。すなわち、「面」(face)の根底的な匿名性が、固定された実体的な諸特徴を具えた人物の疑似—「単独性」を妨げ——、この人物それ自身が、階層や類に属する、同定された存在者の系列の匿名性に向けてすでに歩みつつあるものとして明かされるのである。このことから理解されるのは、「パニックを惹起し—パニックを惹起される」大いなる匿名性こそが——パニックの単独性としてではあるが——真に単独化させるということであり、また、「特徴」において疑似—単独化された人物はすでにして比較可能な匿名性に取り込まれている、ということである。[「スケープランド」という]テキストの以下のくだりにおいて、リオタールが「面」(匿名の動転)と「顔」の違いを過度に強調するきらいがあることには、注意しておこう。同じひとつの動きによって、「顔」は「理解されるべき意味」と「命じる法」の側に保持される(ある種の近さをリオタールはこれらのあいだに設定しようとする——普段はこれら二つの領域の分離と区別を強調するのに対して)。「特徴(traits)を表意文字のように解読し、読み、聴かねばならない。もはやが規律を逃れているのは、ほとんど髪の毛や肌から発せられる光だけである。古の風景を通じて、その残骸のあいだで、法が示すのは、憤り、嘆願、苦悩、歓待、嫌悪、放棄である。法は言う。〈来い〉、〈待て〉、〈君はできない〉、〈聞け〉、〈頼む〉、〈取れ〉、〈行け〉、〈出ていけ〉(Viens, Attends, Tu ne peux pas, Écoute, Je t'en prie, Prends, Va et sors)。悲劇が情熱と債務の場面を舞台に上げるとき、悲劇は風景を空っぽにする。それでも、もしあなたが恋しているなら、本当に恋しているなら、面の逃亡はあなたを捕らえ続け、あなたが顔から発する法を前にして頭を垂れるあいだも、絶えずあなたを掴んで離さない。」「(「スケープランド」、

る。

つまり、ある意味で、リオタールはレヴィナスから「遠く離れて」(loin)、顔を「見て」いる。しかし、別の観点からすると、よくよく考えれば本当のところそれほど遠く離れているのだろうか？

顔が「動転され—動転する風景」であり、純粹な外部であり、隠された内部なき開陳として、解読されるべきあらゆる符号、統御された表象におけるあらゆる可能な手がかりの手前にあるということ、顔がそうした風景であることは、実際、顔についてのレヴィナスの思考の最も根本的な部分と協和していないだろうか？ 言葉は必ずしも同じではないが、課せられる試練はどうだろうか？ 一方によって描写される顔の試練と、他方によって描写される試練は、とても近いのではないだろうか？ ト라우マと拉致。それに加えて——これは別の主題となるだろうが——「風景」によって、「顔—風景」によって要求されるエクリチュールの諸実践——デクリチュール (décriture) とリオタールが書くものと、存在するとは別の仕方での揺動によって破綻に晒された「語られたこと」(Dit) の糸を再び結び合わせる、レヴィナスのシンコペーション的な統語法も、同様にとても近いのではないだろうか？

更に、顔についてのレヴィナスの「記述」をリオタールのものに「接近させ比較する」ことで、しばしば軽視されてきたいくつかの輪郭が浮き彫りになるということがありうる。例えば、「顔」が「顔」をなすのは、対話相手としては決して回収できない「彼性」(illéité) ——人—ならぬもの (la non-personne) ——からでしかない。「彼性」そのものが、こうした特徴づけと効果において、「ある」(il y a) の匿名的未規定性に非常に近い。彼性、更には存在するとは別の仕方だが、レヴィナスの言うように「ある」との不安を感じさせる近さにおいて試練をなすのだとしたら、そして、存在するとは別の仕方での痕跡に還元しえない仕方顔が位置するのだとしたら、そのとき、他人の顔の試練はまさしくレヴィナス自身において、ある還元しえない意味において、「匿名の大きな外部」による動転であり、方位の喪失なのである。言ってしまうと、「顔」の思想家自身〔レヴィナス〕において、「顔」が実体的個人の承認の徴し (マルク)、匿名態から守られるべき人格の同一性の徴しであったことは決してなかったのだ。というよりむしろ、議論はつねにはるかに複雑であったのだ。匿名態が発されるのは、それがまさに、(ひとつの系列でのように) 構成された諸個人を交換可能にするからである。そして単独性とはいうと、それはつねに、語の厳密な意味において計算し

前掲論文) この数行で、リオタールはしたがって三つの要素を区別しようとしている。「表意文字としての諸特徴」、「顔から発する法」、「面の逃亡」の三つである。ここから以下のことがわかる。顔が風景となる——したがって本当に顔となる——のは、あくまでも「面」との張り詰めた同盟関係、すなわち「面」を堰き止めることに失敗するその同盟関係を通じてのみである(顔は「面」を堰き止めようとする努めつつ、どうしてもなく堰き止め損なっている——まさしく一体的に (tout uniment))。にもかかわらず、リオタールは時として、「面」と「顔」の区別を硬直化させ、「法がそこから発する顔」として描写する。これはレヴィナスが言うような顔であり、わたしがその前に頭を垂れなければならないものである。結論部でこの点に改めて立ち戻りたい。

えず、表象しえない、現前さえしえないような、動転の単独性である（決して系列の一単位でなく、類の中の個人でない）。単独性はしたがって、深く匿名的である（この匿名態は、比較を可能にする〈同〉の平板な匿名性とはまったく異なる）。単独性は匿名性の試練から生じる（秩序に同化しえない顔の単独性、それを立証する試練の単独性、「デクリチュール」における証人の単独性）。匿名的であることは、もはや単独であることの逆ではない。この観点からすると、結局のところ、リオタールとレヴィナスは「顔」の試練について親和性をもって証言している。それでも次のことには変わらない。リオタールにおいては、「顔—風景」の試練は「感覚的試練」の最たるものであり、トラウマ的接触の感覚（アイステーシス）であるか——それとも、もしそうであったことを想起するほうを好むのであれば、〈フィギュラル〉の中心をなす欲動であるかであって、倫理的試練などではないのだが、それに対して、レヴィナスにおいては「顔」の試練は倫理そのものであり、美的なもの〔感覚的なもの〕（芸術）の没利害の感情とも、欲望ならびに欲動的なものとも際立った対照をなし、ただし、そのようなものとしては感性的なものと直かに係っている。要するに、顔はリオタールにおいて感性的なものそのものであって、何よりも〈法〉ではなく——、〈法〉は近くからであれ遠くからであれ顔と接触してはならず、顔の巻き添えにされてはならない。それに対してレヴィナスにおいては、顔は感性的なものと直かに係りつつも感性的なものとの際立った対照をなす〈法〉なのである（したがって、それは感性的なものを開き、かつ、つねにすでにそれ感性的なものを超過しつつも、決して「感性的なものなし」ではない）。

その結果、顔をめぐり、リオタールのレヴィナスに対する諸関係には、それぞれに固有な強調点があるのとは別に、奇妙な効果が生じる。

どちらにとっても、顔はパニック、常軌逸脱であり、匿名的なものが課する試練であって、逆説的にもこの匿名的なものは単独化させる——外部、曝露として、あるいは秩序に先立つ「空間性」、リオタールが言うところの「風景」として。リオタールとレヴィナスのどちらにおいても、顔の試練はトラウマと拉致である。とはいえ、なるほどレヴィナスにおいては「顔が語る」は真であり、「顔が語る」は「命令」となり、感性的なもの——感覚（アイステーシス）と際立った対照をなすことでのみ、感性的な現れることを動転させる。それに対して、リオタールにとってはまさに、顔は「語らない」。顔は感性的なものとの際立った対照をなすことはなく、あらゆる関心に先立つ感情のトラウマ的「接触」として（『言説、形象』の時期に準拠するのなら、見られ/見る匿名的な欲動として）、顔は感性的なものそのものである。最終的にリオタールは、二つの動転を区別する。すなわち、命令による動転と風景の動転を。その効果において両者はある程度まで比較可能かもしれないが、各々の本性においては比較不可能であり続けなければならない¹⁰。倫理的命令による審問と風景による動

¹⁰ とはいえ、〔命令と風景という〕これら二つの動転はその効果においては十分に比較しうる。トラウマと拉致は、「いかなる受動性よりも古い受動性」という身分にこの試練の主体を呼び戻すのだ。このことは、少しそこで立ち止まるに値する。リオタールは、命令が感性的なものに関

転は、絶対的に異質で比較不可能であり続けなければならない。『文の抗争』で採用された用語を使うなら、それらは異質な「言語ゲーム」に属しているのだ。レヴィナスはといえば、顔が欲動的なものとしての感性的なものに関わり合いになること（たとえば『全体性と無限』における女性の顔の記述）を実に明晰に洞察している。彼はまた、〈芸術〉が絶えず目指す「ある」（イリヤ）と〈彼性〉（イレイテ）との奇妙な近さについても、それを実に明敏に洞察しているのだが、しかしレヴィナスは倫理的命令だけが真に審問であるとし、感性的なものには（欲動としてであっても、没利害の感情としてであっても）断ち切り際立った対照をなすことを認めない。それにもかかわらず、レヴィナスはこの同じ運動によって、倫理的動転、命令が感性的なもの、まさにこの断絶のなかで必然的に「顔」として関わり合っていることを指し示している。命令は、それがこのように動転させる知覚における感性的なもの、その凹みに、顔として自分をトレースし、他者の顔の具体性以外のどこにも与えられることがないのだが、それがためにレヴィナスは、現象学の断たれた糸——倫理によって断たれた糸を倦むことなく結び直さねばならなくなる。これとは逆に、そして完全に一貫して、リオタールは、知覚における感性的なものとのどんな関係からも命令を解き放つことを求め、レヴィナスについて絶えずこう問いかける。なぜ彼は現象学者であり続けるのか？

したがって、匿名態と単独の間には、粗忽にも対立があると思われるかもしれないが、対立はないことになる。いずれの場合にも、リオタールにおいてもレヴィナスにおいても、顔は「単独化させる」匿名態である。顔は実体的で列挙可能で計算可能な同一性をはみ出すものであり、その反対物そのものを構成する。そしていずれの場合でも、顔の試練は拉致とトラウマなのである。ただし、それでもレヴィナスが「顔」としてまさに次のことを考えているのに変わりはない。すなわち、「顔」は命令が感性的なもの、〈世界〉を穿つ仕方であり、この逆説的な身分でなお感性的なものに関与しているのだ。それに対してリオタールに

わり合いになる (compromettre) ことをどんな場合でも望んでいない。ここでこの点を強調しておきたいが、そうであるにしても、彼自身もちろん、命令によるトラウマ的召喚が「主体」ととしての感性的試練であり、その肉に刺さった棘であることに、限らない注意を払っていた。ここでもなおリオタールはレヴィナス、とりわけ『存在するとは別の仕方』のレヴィナスと親密に協和している。同書は〈他〉の倫理的試練を「出血」「摘出 (énuclation)」「皮膚を越えた核分裂、死に至るほどの傷」として記述する。リオタールは感性的なものによるどんな汚染からも命令を絶対的に守っているが、その一方で『言説、形象』から『何を描くのか？』への道行においてリオタールはおそらく、芸術の異教性 (paganisme) の内在を離れ、感性的なものの中心そのものに匿名的外部によるトラウマ的拉致を刻み込もうとしている。そして、その外部はまさに、リオタールがユダヤ教に、とりわけレヴィナスに結びつける命令の試練にならって考えられているのではないだろうか（とはいえリオタールは、命令を、命令がそうしたものであるがゆえに、感性的なものそのものから絶対的に守ろうとしている...）。クリスティーヌ・ビュシ＝グリュクスマンは「芸術の抗争」（ジャン＝フランソワ・リオタール『カレル・アペル、色の身振り』、ルーヴァン大学出版、2009年、後書き）でこの意味で考えるよう促している。このテキストはジェラルド・スフェズの *Ce qu'il veut, avec présence* で引用され、議論されている (op. cit., p. 419)。

においては、存在に対する命令の異質性——まさにこれをリオタールはレヴィナスから学んだ——が、命令は存在ないし〈世界〉にまったく接触してはならない、関わり合いをもってはならない¹¹と命じているように見える。しかしリオタールは、レヴィナスが考えるような顔をそのように無効にしつつも、あらゆる顔を無効にするのではなく、顔を「他所で」考える。リオタールは顔を風景として考え（どんな顔も、風景として方向感覚を失わせ、トラウマを与え、拉致する）、また、あらゆる風景を（「山が私を見ている」のだから）顔として考えるのだ。

われわれは、リオタールが顔について論じる際の、レヴィナスに対する沈黙——いわば「忠実さ」からの「回避」——を解明しようと試み、そしてまた、単独性と匿名態との一般に受け入れられている対立を粉碎しつつ、二人の思想家が両者の関係を再編する術をわれわれに教えてくれる際の、二人の思想家のあいだの親和点を感じ取れるものたらしめようと試みた。

リオタールのレヴィナスへの忠実さと不忠実さの絡み合いをめぐる考察を起点として、ある問いを響かせることが課題として残されている。すなわち、顔について、倫理的な厳命による動転と（没利害の感情ないし欲動的なものそのものと同定される）感性的な動転のどちらかを本当に選択しなければならないのだろうか？ 命令する「倫理的な顔」（レヴィナス）と、感性的拉致ないし欲動としての「風景たる顔」（リオタール）の間でどちらかを選ばねばならないのだろうか？ 結局のところ、リオタールもレヴィナスも、感性的なものと倫理が定義上緊張関係にあり、互いに際立った対照をなす（それぞれの遂行においては、いくらかの類似を認めるべきだとしても）という考えに同意しているように見える。リオタールとレヴィナスは、その抗争を統御するその仕方についてのみ抗争することになるのだ。しかし結局のところ、顔についてレヴィナスとリオタールを一緒に読むことは、ある別の道をわれわれに指し示しているのではないだろうか。少々彼らに抗して、あるいは彼らの意に反して（おそらくはレヴィナスよりもリオタールに抗することになるだろうが）、撞着的な緊張をなんら失うことなく、感性的なもののなかでの倫理の微行¹²、あるいは倫理における感

¹¹ リオタールはレヴィナスに対して根底的に忠実であろうとするのだが、その忠実さがリオタールにこう命じるかのようだ。感覚的な現れと命令との、現象学と倫理との、そしておそらくはまた、情動ないし欲動の接触と命令とのあいだの汚染的結合において、まさにレヴィナスに従ってはならないのだ。この汚染的結合は「倫理的顔」にまで及んでいるのだ、と。

¹² 『全体性と無限』における女性的な顔に捧げられた紙幅を思い起こすのであれば、レヴィナスに抗してより以上にリオタールに抗して。そこでレヴィナスは倫理的試練をその冒瀆のまさに只中で維持し、おそらく強めさえしている。この箇所は、倫理と、欲動的なものとして引き受けられた感性的なものとのあいだの汚染の側にまで踏み込んでいる（リオタール『言説、形象』を参照）、あるいはむしろ、本源的汚染の境界を越えないような接触へと向かっていると言いうる。『存在するとは別の仕方での』レヴィナスはというと、倫理的試練そのものを没利害な感受とし、尺度なく「代わりに苦しむ」(souffrir pour) ことたる愛たらしめている。レヴィナスが「倫理的なもの」として引き受ける没利害の感情を、『何を描くのか？』のリオタールは感性的なもの〔美

性的なものの微行を、更には一方が他方に汚染されることさえ思考することを強いられるのではないだろうか？ 命令する顔に前にして頭を垂れることと、唇を唇に近づけて——接吻することという二重のゲシュタルト (Gestalt) について。

的なもの〕として（倫理的なものとしてでなく）同定する。様々な仕方で、この不純な現象学者たるレヴィナスにおいては、（世界の）感性的現れの倫理的命令による断絶の根底性がそれ自体として尊重されるのだが、その尊重は、倫理的命令の感性的刻印（利害的な欲動の刻印、没利害的な「愛」の刻印）において当の根底性が危険にさらされることと表裏一体である。対するリオタールは——感性的なものについての思考の大きな異動のまさに只中で——感性的なものとは異質な「言語ゲーム」としてつねに命令を守るだろう。彼は命令が、〈フィギュラル〉に住まう欲動によっても、情動の「接触」のなかで、『何を描くのか？』で註解を加えられた画家たちの作品のなかで作動する感情——それが没利害の感情であるとしても——によっても、汚染されないよう守っている。